

世の中には実に多種多様な職業がある。本書はそうした職業を中高生向けに紹介するシリーズ「なるにはBOOKS」の一冊。葬儀社スタッフ、葬儀司会者、僧侶、石材店スタッフといった葬祭業界で働くためにはどうすればいいのかを、実際に働いている人へのインタビューなどを通じて紹介している。また、「お

葬祭業界で働く
薄井秀夫・柿ノ木坂ケイ著



給料は?」「どんな人が向いている?」といった素朴な疑問に丁寧に答えている。たとえば、映画『おくりびと』で有名になった職業、納棺師の場合は「大卒の初任給は18万~20万円」「遺体を持ち上げるので体力が必要」がそうだ。その職業を目指さなくても、読み物として楽しめる。(ペリカン社 1200円+税)

「終活読本ソナエ2014年秋号」に登場していただいた、日本初の遺品整理業者「キーパーズ」の社長が記した「親片(おやかた)」の決定版ともいえる一冊。核家族化が進んでいる現代、離れて暮らす親の家を片づけるのは交通費だけでもバカにならない。そのうえ相当な労力もかかる。そこで、プロに任せてしまおうの

親の家を片づけるなら
「プロ整理業者」に任せなさい
吉田太一著



もひとつの手。廃棄物処理会社ではなく、遺品整理業者は遺された物を丁寧に整理するので、気持ちよく故人と別れる手伝いにもなるという。さらに、本書は遺品だけにとどまらず、近年問題化している「空き家になった実家」そのものを片づける方法や注意点も紹介している。(主婦の友社 1300円+税)

「葬儀」「お墓」「相続」といった終活の王道を丁寧に解説している一冊。監修が行政書士だけに、老後の財産管理方法などが充実している。相続の基礎知識や一族が相争う「争族」を防ぐための遺言の書き方などの情報が満載。また、認知症になってしまった場合に活用できる「法定後見」や、元気なうちから信頼できる

エンディングノートでもしにも備える

終活のススメ
東優監修



人を見つけておき、いざというときに財産管理を頼む「任意後見」の仕組みやメモットなども紹介している。このほか、尊厳死や余命宣告などの終末期医療についても詳しく取り上げており、全般的な知識を得るにはうってつけ。巻末にはすぐに使えるエンディングノートが付いていてお得。(リベラル社 1400円+税)

故郷にある先祖代々のお墓がもう管理できない。少子化や大都市への人口集中が進む現代は、誰もがこうした問題に直面する可能性がある。こういう場合に「改葬」だ。本書はストーリー仕立てで改葬のやり方や墓所の選び方などで注意すべき点を解説している。たとえば、「改葬先とし

ゼロからわかる墓じまい

吉川美津子著



て検討している墓所が「宗旨宗派不問」とあっても、「キリスト教でもイスラム教でもOK」という意味だとは限らない」といった、目からうろこが落ちるような知識が満載。また、「改葬後にこれまで使っていた墓石は売れるのか」といった素朴な疑問にも丁寧に答えている。(双葉社 1300円+税)

タイトルをみるとハウツーもののように感じられる。確かに「エンディングノートと遺言書の違いは?」「お墓の移転はどのようにしますか?」といった、直接役に立つ終活情報を一問一答形式で紹介している。しかし、本書は単なるハウツーにとどまらず、「なぜエンディングノートが生まれたのか」「なぜお

本当に役立つ
「終活」50問50答
尾上正幸著



葬式が必要なのか」「お墓の意味とは」などといった根源的な問いを提示することによって、「終活とは人生の終い支度ではなく、残りの人生を楽しく過ごすためにするもの」ということを浮かび上がらせている。また、この種の本のなかでは「自分史」に関する情報が豊富なのも特徴。(翔泳社 1380円+税)

老前整理とは「老いる前に身の回りを直直し、これからの暮らしを考えてモノと頭を整理すること」と筆者は言う。本書は物理的な片づけにはとどまらず、思い出や人間関係を整理し自分の老後のライフスタイルを決めていくことにも重点を置いている。年を取るとモノが捨てられなくなるのは、そのモノに思い出が詰

老前整理のセオリー

坂岡洋子著



まっているからであり、整理することは過去の自分との対話。そして、整理できればスペースが生まれ、そこに新たなイメージを描くことができるという。思い出の代表格ともいえるアルバムや、人間関係を示す年賀状の具体的な整理方法など、実践的なアドバイスも満載。(NHK出版新書 740円+税)